

令和5年度学校評価報告書 後期最終評価 【国立市立国立第七小学校】

学校教育目標	担当校務分掌	年間経営目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		成果	課題	学校関係者評価		
					中間評価	最終評価					
かしこく	研究推進	①授業を支える授業規律を身に付けさせる。	○授業開始と終了時のあいさつを学年で統一し、指導する。 ○発言をするときは、指名されて「はい」と返事し、起立して発言させる。語尾までしっかりと言うことを指導する。 ○教師や他の児童の話聞くときは、自分の行動を中断して、話している人の方を見ながら話を聞くように指導する。	A 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの80%以上の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 B 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの60%以上80%未満の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 C 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスで意欲的に学習に取り組んでいる人数が60%未満。	B 76%	A 82%	・年度当初から、各学級を中心に児童に授業規律を身に付けさせることができた。 ・各学級が、落ち着いた学習に取り組む環境をつくることのできたことが、授業規律の徹底につながった。	・進級に伴う環境の変化(クラス替え、新しい担任など)によって、これまで身に付けてきた授業規律が乱れないように、引き続き学校全体での共通理解と、統一した指導が必要である。	・コロナ禍も明けて学校の授業の様子も見ることができるようになった。 児童が落ち着いた学習している姿を見て安心することができた。 ・繰り返し学習しても、基礎学力の定着が難しい児童もいる。今後、先生方の創意工夫ある授業で、どの子にも分かる 授業を実践 してほしい。 ・ 道徳の研究を行ってきたこと で、 児童同士が、仲よく関わる ことのできている様子が見られた。		
		②自分の考えをもって、自ら考えを表現しようとする児童を育成する。	○児童が自分事として考えられるように課題を設定し、前向きに活動できるようにしていく。 ○児童の考えを認め、価値付けながら自ら表現しようとする児童を励まして自信をもたせるようにする。 ○児童の実態に応じながら、児童同士が考えを交流する機会を意図的に設け、互いに受け止め合えるように指導する。	A 児童の自己評価により、自分の考えを自ら表現しようとして児童が、クラスの80%以上 B 児童の自己評価により、自分の考えを自ら表現しようとして児童が、クラスの60%以上80%未満 C 児童の自己評価により、自分の考えを自ら表現しようとして児童が、クラスの60%未満	B 70%	B 70%	・校内研究において取り組んできた道徳科での実践を、他教科等でも効果的に活かすことができている。 ・教師が児童の実態に応じて、励ましたり認めたりして、児童の考えを適切に価値付けることができた。	・児童同士で考えを交流するときにも、互いのよさを認め合いながらやりとりができるようになっていくことが求められる。その際、教師と児童とのやりとりを手本として、児童が自然にできることを目指していく。 ・表現の方法を選択できるようにしたり、目標を個別に設定したりすることも考慮に入れた授業づくりをしていく。			
やさしく	生活指導・特別活動	③自分を大切にし、自分に自信がもてる児童を育成する。	○保護者と必要に応じて連絡を取り合い、児童が自分自身の課題に対して取り組もうとする姿勢のよさを共有し、励まし支援する。 ○教室での様子や授業中の児童の発言を、価値付けし、児童が自分の良さに気が付けるようにする。 ○担任による全員面接の際、児童の長所を一人一人伝えることで児童自らが自己肯定感を高められるようにする。	A Q-Uアンケートにおける、学校生活満足 群の児童が全国平均より10%以上 B Q-Uアンケートにおける、学校生活満足群の児童が全国平均と同等 C Q-Uアンケートにおける、学校生活満足群の児童が全国平均より下	B 49.3%	A 59.9%	(6月実施) 本校 42.5%	(11月実施) 本校 42.5%	・全国の平均を上回り、更に前回よりも数値が上がった。学年別でみるとばらつきがあり、低学年より、中学年、高学年の方が学校満足群の数値が高い傾向にあった。今後も、教科の指導と生活指導の一体化を図り、児童一人一人が自分を大切にし、自信がもてるように育成していく。 ・約5%の児童は、休みがちであったり長欠であったりする。SC、SSW、民生委員などの関係機関と連携し、共有した情報をより分かりやすく記録化していく。不登校の児童には、引き続き「学びの場」や「学びの環境」を整えていくようにアプローチしていく。	・いじめや不登校の未然防止に向けた 取組アンケート などを実施していることが分かったが、 どのような内容なのか知りたい 。また、 アンケート後に、教職員が直接児童と面談をしていることが分かった 。児童の様子を把握したり、 研修を行ったりするなどの丁寧な対応が成果として表れている と考える。 ・いじめや不登校 対策委員会 を開いて、早期に対応していることが成果につながっていると分かった。 ・挨拶については、 登校時の様子を見て いると、できていたりできていなかったりする様子が見られる。児童が挨拶できるようになるためには、学校、家庭、地域のどこかが教えていく ものではなく 、学校、家庭、地域が一緒になって挨拶できる児童を育んでいく必要がある。PTAのあり方も検討し、保護者同士のつながりを大切にできる場にしていきたいと考える。	
		④仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめをしない児童を育成する。	○学校生活を通した個と集団への働きかけとして、様々な相手と協力する大切さに気付くようにさせる。 ○全教職員が児童のちょっとした変化を見逃さずいじめの未然防止に努める。 ○日々の児童同士のトラブルは即時解決を図り、トラブルを乗り越える力を児童に身に付けさせる。 ○生活指導夕会やいじめ、不登校委員会など教職員間で児童の様子をしっかりと把握し、早期発見及び早期対応の徹底を図る。	A 認知したいじめの件数の解決が100% B 認知したいじめの件数の解決が99% C 認知したいじめの件数の解決が99%未満	B 99%	B 99%	・認知したいじめのうち臨時対策委員会を開く案件に関しては、3カ月間は経過観察をして記録をとり解決を図ることができた。 ・日々の児童同士のトラブルに対しても、教職員で共有し組織的に対応することができた。 ・教職員が率先して挨拶を行い、児童に模範的な姿を見せたり、児童の挨拶を価値付ける言葉掛けをしたりすることができた。	・臨時対策委員会を開く案件が2月に1件挙がっている。早期対応を組織的に取り組んでいる。経過観察として記録をとっている。 ・引き続き、「いじめは絶対に許さない」という学校風土を守り、指導していく。			
		⑤すすんで挨拶ができる児童を育成する。	○月目標のめあてや振り返りの指導を通して、児童の姿容やできた場面を意図的に価値付ける。 ○挨拶の大切さや必要性について、繰り返し指導し児童自らが気が付けるようにする。 ○教職員が率先して挨拶を児童に行い、模範的な姿を見せる。	A 90%以上の児童が身に付いている B 80%以上90%未満の児童が身に付いている C 身に付いている児童が80%未満	B 87%	B 89%	・年間生活目標や月毎の生活目標を通して、各学級で具体的な目標を立てたり振り返りをさせたりしたことと、児童が挨拶を意識して生活することができた。 ・生活場面だけでなく、教科学習の中でも挨拶のよさについて考えていけるように指導していく。 ・引き続き見守り会にご協力頂いたり、保護者の協力を呼びかけたりし、児童を育てていく。	・数値は上がったが、評価としては、中間と変わっていない。引き続き児童が挨拶できている姿を、教職員が意図的に褒め価値付けていく。 ・生活場面だけでなく、教科学習の中でも挨拶のよさについて考えていけるように指導していく。 ・引き続き見守り会にご協力頂いたり、保護者の協力を呼びかけたりし、児童を育てていく。			
		⑥意欲的に学校生活を楽しく過ごすことができる。	○学校生活や授業、行事を通して、全教員で児童の「居場所づくり」「絆づくり」…児童が学校において「自分が大事にされ、存在を認識されている」など、自己存在感や充実感を感じられるような活動を意図的に設定する。 ○「絆づくり」…児童が主体的に取り組む共同的な活動を通して、児童同士の絆が深まる場を設定する。	A 学校を楽しんでいると感じ、友達という時間や先生と話す時間が好きな児童が90%以上 B 学校を楽しんでいると感じ、友達という時間や先生と話す時間が好きな児童が70%以上90%未満 C 学校を楽しんでいると感じ、友達という時間や先生と話す時間が好きな児童が70%未満	B 87%	B 84%	・各学級担任が、学校生活アンケートの結果やQ-Uの結果を活かして、学校を楽しんでいると感じていない児童や学校不満足群にいたる児童に、個別に対応することができた。 ・高学年を中心に、委員会やクラブ活動、縦割り班活動で、児童が主体となって取り組む共同的な活動を充実させることができた。	・前期よりも数値が3%下がっていた。アンケート結果やQ-Uから、学校を楽しんでいると感じられない児童や「学校生活不満足群」の児童を把握し、各担任が個別に対応していくと共に来年度は、特別活動部からも学級開きのエンカウンター等を紹介していく。 ・縦割り班活動や児童集会を充実させ、学級以外でも「居場所づくり」「絆づくり」ができるようにしていく。			
		げんきよく	体育・保健	⑦基礎的な体力向上における課題克服のための取組に努める児童を育成する。	○元気アップタイムや短縄月間の取り組みを充実させ、運動や外遊びを推奨する。 ○昨年度の東京都の体力テスト結果を分析し、とくに苦手な種目について、改善への取り組みを実施する。 ※1年生は今年度の体力テスト結果が返却され次第、評価を行う。 それまでは、体力テストの各種目のやり方について指導を行う。 ○体育授業の常時活動として、苦手な種目を克服できるような運動を準備運動などに取り入れる。	A 運動や遊び、短縄週間取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が90%以上 B 運動や遊び、短縄週間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が70%以上90%未満 C 運動や遊び、短縄週間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が70%未満	B 70%	B 75%	・元気アップタイムの取組では、全校で遊んだり、走ったりする楽しさを経験させるよい機会となった。また、体力テストの結果から、課題となる持久力や瞬発力を鍛える運動も取り入れることができた。 ・短縄週間では、多くの児童が外に出て、積極的に外遊びに参加している様子が見られた。	・普段の生活では外で遊ぶ児童が固定されていることが考えられる。元気アップタイムや短縄週間、体育の授業時間を活かして、引き続き運動の楽しさを伝えていく。 ・体力テストの結果を基に、課題となる領域の動きを体育の授業の始めの10分程度、継続的に取り入れていく。	・感染症予防による活動の制限がなくなったことで、児童が伸び伸びと体を動かすことができるようになった。今後も、 運動の楽しさを伝える ことを通して健康な体力づくりをしてほしい。 ・学校教育の中で、 避難訓練等を実施していることで自分の身は自分で守るという意識が高まっている と感じる。 家庭や地域の中でも、児童の安全を見守っていくことが大切である。
				⑧自分の身は自分で守ろうとする力を身に付けさせる。	○避難訓練や防災訓練、セーフティ教室や交通安全教室を実際の場面や具体的に場面を想定した内容で実施し、事前・事後の指導の充実を図る。 ○児童自らが、熱中症や感染症に対する予防に取り組めるよう、環境整備を図る。 ○ヘルプスキルを高められるような指導を繰り返し行い、児童自身が、心を安定させて過ごすための手段や方法を身に付けられるよう具体的に教える。	A 90%以上の児童が身に付いている B 80%以上90%未満の児童が身に付いている C 身に付いている児童が80%未満	B 89%	A 92%	・各教科の学習活動との関係も意識した指導を今後も繰り返ししていく。 ・学級担任は特別支援教室の教員、専科教員、関係機関や保護者との連携を図り、児童の実態把握に努める。継続して児童との関係を深めていくことで、児童が安心して相談できる関係を築いていく。 ・日常生活の中で、時事的に必要な場面(災害や事故が発生したとき)では、児童の実態に応じて安全指導を繰り返していく。		